

# 図書室月報

2021年(令和3年)8月5日

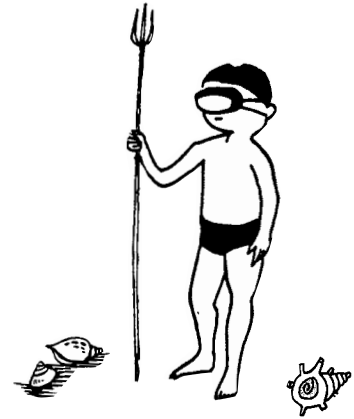
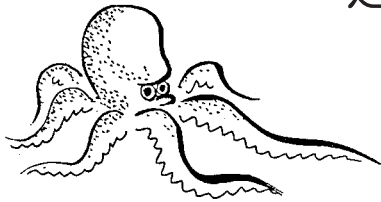
第699号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

## ヒトと進化論 進化論とヒト

～泡立った妄想～

木本 久代



その本を執筆された著者に直接その本の核心を聞く。伝え知る評論等ではなく、当の筆者から話を聞くので、これ程生ものはない。言葉の端はしを聞き漏らすまいと、あるいは著者が一番好んでいる、でも一寸人にはストリートに話したくない風

に言いかけて止めたたりする箇所には、特に目を光らす。耳を敬んで隠された言葉を探る。まるで自分だけが本の中の核心を著者から盗み出せたように。だから私の「図書室のつどい」の二時間は、目、耳、それに当てに

ならない裏感覚とも言うべき第六感をふんだんに使った著者との空中戦でもある。そして裏感覚の絡み合いによって今回生じた私の妄想はこんなものである。

一夫一妻のオスは二足歩行に変化し易かったことを知ったが、この二足歩行となった「ヒト」がずーっと、ずーっと通り過ぎてきた時間を、今を起点として折り紙のようにパタンと未来の方へ折り返した時に、その未来側の先端には何があるのか。

一夫一妻のオスは二足歩行に変化し易かったことを知ったが、この二足歩行となった「ヒト」がずーっと、ずーっと通り過ぎてきた時間を、今を起点として折り紙のようにパタンと未来の方へ折り返した時に、その未来側の先端には何があるのか。

そう、その先っぽのある時期、若者達が話している。昔って女の人がお腹の中で赤ちゃんを人の形に成るまで抱えていたんだって。それに子どもを作るのに男の人と女の人の直接結合が必要だったんだって。大変だったね。

また先っぽのある時期には……文字を使うことで記憶を外に貯えることになった「ヒト」の脳は少し小さくなったことも知ったが、さらに、重要な機能――例えば思考することの一部等を身体の外に置く(外注する)ことを学習した「ヒト」の脳はより小さくなり、それを進める

身体機能末端(指、目等)は逆に新しい変化をしているのか。それらの変化は進化と同じライン上にあると言えるのだろうか。

二足歩行に移って行く時に、一夫一妻のオスの方が移行し易かったことを改めて思い出してみよう。超未来に向かうある時期、変化する自然環境、変革する科学環境の中で、有る物を壊したり、改革したり、より安全で心地よい生き方を外側に求める「ヒト」がいて、もう一方で変化する環境すら受け入れて、より生存率を高めるよう身体を外形すら変化適合させていく「ヒト」も現れるかも知れない。



進化の過程には多くの分岐点があったことも知ったが、これから超未来へ進んで行く「ヒト」の中にも分岐点が生まれるのだろうか。そして進化となるのだろうか。

そしてもう一つ、進化の過程でメンタルはどんな作用を果たしてきたのか。これから思考の外注が拡大していく中でメンタルは侵されないのか。

教わり知ることは刺激的であり、私にとって楽しさの根源であるが、時に妄想が泡立ち始め先へと進みたがる。それを引き張り上げ自分でも分かる言葉化するために、さらに知ることを求めて私は、また頭から「本」に突っ込んでいく。

ブッククラブから

## 柳美里著 『JRR上野駅公園口』 天野聖子



これは東北の寒村から常磐線に乗って出稼ぎを繰り返した男の物語である。天皇と同一年の主人公は天皇第一子の誕生日に長男が生まれたので名前に「浩」の一字を使った。

昭和35年2月23日、「親王がご誕生になりました。御母子共にお健やかであります」

産婆を呼ぶ費用がなくて貧困状態にある自分の境遇に絶望した日、こんなニュースがくりかえし流れた。

その後は息子を貧困から脱出させるためにきつい労働にも耐えて仕送りをした。だがレントゲン技師の国家試験に合格した直後、息子は21歳で突然死する。喪失感で生きる意味も目的も一瞬のうちに崩れ落ちた。

それでも出稼ぎを続け60歳によりやく家に戻ってくる。それから数年後、ある朝目覚めると妻が自分の隣で亡くなっていた。こうした相次ぐ不幸と苦しみを受け止めきれずに男は出奔、上野公園でホームレスになって暮らす。実はここからの男の視点と前後する場所や時代の流れがこの作品の本質だ。

人は自分の生まれる場所を選べない、戦前の炭鉱―戦中の満州―出稼ぎ―と流れは続き、高度成長の只中にも原発は海沿いの小さな町に次々やってきた。その後の津波と原発事故……この「辺境の歴史」とも呼ば

れる縦の時間に、個人的体験である身内の死や家庭崩壊、病気や事故が加われば、「画鋲がばらまかれたような」痛苦に満ちた人生になってしまう。そんな日に彼はたまたま天皇の行幸に出くわした。この描写は圧巻で、あらゆるものが繋がって見えてくる。

皇族関係者が上野美術館などを訪問するときホームレスは山狩りと言ってコヤから立ち退かされる。たまにこの山狩りにあつた彼が雨の中をあてどなく歩き回っていると、急に私服警官が横断を遮るロープを張って、天皇陛下の御料車が通ると通行人に告げる。あの時のアナウンスが脳裏に蘇る。

昭和35年2月23日、「親王がご誕生になりました。御母子共にお健やかであります」

徐行した車から見えた天皇も皇后もあくまで柔和で優しい笑顔だ。

彼の中で怒りや無念さが爆発しそうだった。言いたいことが喉元まで溢れた。出て行って何かを言いたいのに何も言えない、動けない、そして「自分は、一直線に遠ざかる御料車に手を振っていた」この微妙な心情が突き刺さる。私の中で『ヤマザギ、天皇を撃て!』という若い頃に流行った本の題名が頭を掠めた。この怒りが体制の頂点にいる天皇本人にぶつけられる時代は過ぎてしまったのだろうか、「超ラッキー!なま天

皇陛下じゃん!」と写メで嬉しそうに写真を撮る若者たちにはもう天皇問題は週刊誌を賑わせるネタの一つでしかないだろう。

彼は動けない、そして小さく手を振るのだ。その反動のように電車に飛び込む時には津波で最愛の孫が流される場面が放り投げるように書かれていた。

環境が違えばだれもが似たような境遇に陥るかもしれない。それなのに運が良かったからと言って大事なものに心を止めないまま年を重ねれば、人は自らの些末な出来事ばかり語る「通行人」の一人にすぎなくなる。作者は消費経済のど真ん中で美味しいところを掠め取ってここまでできてしまった私達の日常や文化をひっくり返そうとしたのかもしれない。2021年7月現在、コロナ下での強引なオリンピック開催、そこでのさらなる格差の拡大や、新たな貧困、自殺率増加とこの国の縦の流れは続いている。

最初から最後まで自分が問われ続けた作品だ。

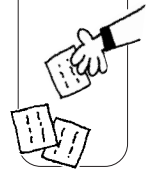
ブッククラブでは同じ本でも全く違う読み方をする人もいて、そのバラバラな視点が30人分あるというところが面白い。

新着図書から

〈総記〉 わたしの、本のある日々 小林聡美(毎日新聞出版) 019	〈歴史〉 〈弱者〉の帝国 ジェイソン・C・シャーマン(中央公論新社) 二つの世界大戦への道 中井晶夫(えにし書房) 234 ブラック・ライヴズ・マター回想録 パトリース・カーンIIカラーズ(青土社) 289 高尾山ハイキング案内 (山と溪谷社) 291 不思議の国のラオス 森山明(彩流社) 292 〈社会科学〉 現代カナダを知るための60章 飯野正子総監修(明石書店) 主権者のいない国 白井聡(講談社) 304 権威主義 エリカ・フランツ(白水社) 313 コーカサスの紛争 富樫耕介(東洋書店新社) 316 憲法学者の思考法 木村草太(青土社) 320 再犯防止から社会参加へ 金澤真理編(日本評論社) 326 檻の中の裁判官 瀬木比呂志(KADOKAWA) 327 パンデミックは資本主義をどう変えるか ロベール・ボワイエ(藤原書店) 332 コロナ禍に立ち向かう働き方と法 和田肇編著(日本評論社) 366 災害女性学をつくる 浅野富美枝編著(生活思想社) 367 老後レス社会 朝日新聞特別取材班(祥伝社) 367 見えない妊娠クライシス 佐藤拓代編著(かがわ出版) 367 ルポ婚難の時代 筋野茜(光文社) 367 ジェンダー分析で学ぶ女性史入門 総合女性史学会編(岩波書店) 367 処女の道程 酒井順子(新潮社) 367 コンセントの向こう側 中筋純(小学館) 369 生活不安定層のニーズと支援 西村幸満(勁草書房) 369	国境なき技師団スマトラ島から東北へ 濱田政則(早稲田大学出版部) 369 10年後の福島からあなたへ 武藤頼子(大月書店) 370 学校が「とまった」日 中原淳監修(東洋館出版社) 370 京都市の在日外国人児童生徒教育と多文化共生 磯田三津子(明石書店) 371 超えてみようよ!境界線 村山哲也(かがわ出版) 372 世界の「常識」図鑑 御手洗昭治編著(総合法令出版) 382 交差する辺野古 熊本博之(勁草書房) 395 〈自然科学〉 迷走生活の方法 福岡伸一(文藝春秋) 404 物理学者のすごい思考法 橋本幸士(集英社インターナショナル) 420 人類史マップ テルモ・ピエバニ(日経ナショナルジオグラフィック社) 469 私の顔はどうしてこうなのか 溝口優司(山と溪谷社) 469 かぐわしき植物たちの秘密 田中修(山と溪谷社) 471 深夜薬局 福田智弘(小学館集英社プロダクション) 499 〈工業〉 「はやぶさ2」が拓く人類が宇宙資源を活用する日 川口淳一郎(ビジネス社) 538 〈産業〉 知られざる拓北農兵隊の記録 鶴澤希伊子編著(高文研) 611 〈芸術〉 ちひろ、らいてう、戦没画学生の命を受け継ぐ 小森陽一(かがわ出版) 723 オオカミ県 多和田葉子(論創社) 726 それでも僕は歩き続ける 田中陽希(平凡社) 786 〈文学〉 みっちゃんの声 石牟礼道子(河出書房新社) 91 コンジュジ 木崎みつ子(集英社) 91 その扉をたたく音 瀬尾まいこ(集英社) 91
---	---	--

一節

中川越著『文豪通信』



実は私は現代語や古文や漢文が苦手でした。文豪や文人墨客が遠い存在に思われ、積極的な興味がわかなかつたからです。しかし、文豪書簡に接してからは、その印象は一掃されました。

漱石が東大で英文学の先生をしているときに学生に宛てた、愉快な、あるいは感動的な手紙の数々を読んだとき、漱石本人に直接会った気がしました。それまで学校の先生や碩学(せきがく)の評論について教え込まれていた漱石はウソ、というのは言い過ぎかもしれませんが、ほとんど別人のような温かな漱石が、書簡集の中で、慕わしく思っています。

たとえばこんな手紙があります。明治三十七年、まだ漱石が東大の英文学の先生をしていたとき、親しい学生野村伝四に、モロッコ国の歴史の概要を図書館で調べて急いでまとめて書いて欲しいと頼みました。そうして追伸をこう添えました。

「是非やってくれなくてはいけない、いやだ(な)といふと卒業論文に零点をつける」

もちろん脅迫ではありません。漱石は貧乏学生を支援するために、わざわざ用をいいつけては、小遣いを与えていたようです。恩着せがましくならないように、わざとパワハラを装ったのです。野村伝四は、生涯この手紙を宝と大切にし、世紀を二つ隔てて今に伝わります。(河出書房新社)

今回の一節は、9月12日、10月3日、10日に実施予定の講座「文豪達の傑作手紙」の講師、中川越さんの一節を紹介いたします。※講座の詳細は公民館だよりをご覧ください。

# 東日本大震災から10年

東日本大震災から10年、公民館では、節目の年として改めて震災を振り返り、今後の社会のあり方について考えるような講座を企画しています。すでに開催したものもありますが、開催予定の講座とともに、講座の参考となるような図書を紹介します。講座の詳細は公民館だよりをご覧ください。

## 講座参考図書

- \* 白い土地 ー ルポ福島「帰還困難区域」とその周辺  
三浦英之 (集英社クリエイティブ)
- \* コンセントの向こう側 中筋純 (小学館)
- \* 仮設住宅その10年ー陸前高田における被災者の暮らし  
宮城孝編著 (御茶の水書房)
- \* 福島の記憶 ー 3.11で止まった町 飛田晋秀写真・文 (旬報社)
- \* ふくしま原発作業員日誌 片山夏子 (朝日新聞出版)
- \* 10年目の真実 増井祐介 (きょうされん)
- \* 災害女性学をつくる 浅野富美枝編著 (生活思想社)
- \* もしもごはん 今泉マユ子 (清流出版)
- \* 災害から家族と自分を守る「災害心理」の基礎知識  
野上達也 (セルバ出版)
- \* 福島を耕す 坂本充孝 (愛育出版)
- \* あわいゆくころー陸前高田、震災後を生きる 瀬尾夏美 (晶文社)
- \* 雨ニモマケズ ー 外国人記者が伝えた東日本大震災  
ルーシー・バーミンガム (えにし書房)

## 開催予定の講座

1. 福島から届ける原発事故10年の被害  
～帰宅困難区域と原発処理水の海洋放出～  
① 8月1日(日) 帰宅困難区域のこれまでとこれから  
② 8月29日(日) 大熊町スタディーツアーと被災経験  
③ 9月18日(土) 福島から見た「処理水の海洋放出」
2. 8月28日(土) 仙台フィルから学ぶ復興支援のかたち
3. 9月5日(日) 「死んでもいい」から「精一杯生きる」へ

〈私の本棚から 第5回〉

筒井康隆著

『にぎやかな未来』



上野千晴

昭和47年に文庫初版発行である。49年も前の作品とはとても感じない。ちっとも古さがない。平成初期に読んだ際、既に未来を身近に想像させた。万が一にもこんな未来が来るのかもしれない、否きつと来るのだらうと、不気味さと底知れぬ不安を感じさせる不思議な作品だった。

ショートショートとの出会いがこの本。最初が星新一ではなく筒井康隆。ブラックユーモアが癖になる面白さに、前のめりで引き込まれた。架空の未来の物語。どれも淡々としていて、びっくりするような結末はあまりないのだけれど、何故か妙な怖さがある。卑怯で卑猥で猟奇的。描かれる人間模様は今の人間と何も変わらない。作られた世界であると分かっているからか、物語の中に滑稽さが見え隠れするからか、嫌悪感は少ない。むしろ、これぞ人間の性、と納得させられてしまう。中には、私の読解力不足から、結末の意味がよく分からないものもあり、情けない限り。

刊行当時からしたら今は立派な「未

来」だらう。宇宙船の話も数多く出てくるが、今やもう絵空事ではないところまで宇宙開発は進んでいる。作者はどこまで、今の未来が見えていたのだろうか。もしや時をかけて未来を覗いてきたのでは？と思ってしまうくらい、現代が抱える問題を如実に風刺している。所詮、世の中が50年進んでも人間の根本は変わらないのだらう。技術革新に、人の心は追隨していけないのである。

実際はそれが人間の本质であると突き付けられている。医学発展や技術革新に見えているものは、いつの間にか、おごりや凶器となり身を滅ぼしかねない。見えていたものが表裏逆転していることに気づけないまま、にぎやかな未来がやってくるのだらうか。どちらが表で、どちらが裏か。ねじれた人間の素顔を上手く表現している。どちらを返しても人間の醜さを晒されているようで、筒井康隆おそろし。

「腸はどこへいった」は、何年も頭から離れず忘れられない。世の中そんな都合よくいかないものだと思える。羞恥の極みで思い知るのだ。己の始末は己で取れと言われているようだ。人間よ、全ての入り口と出口は繋がっている。己の始末、己の行く末、全て己で取り給え。未来を覗いた過去の作者からの皮肉たっぷりの予言書である。(角川書店)